★皇軍の倫理★　　谷口雅春

一

皇軍は国民戦線でもなければ人民戦線でもない。政府軍でもなければ国民軍でもない。だから政府が代わっても皇軍は微動だもするものではない。皇軍はすめらみことの軍である。天皇に直属し、天皇の統帥し給ふところである。天皇のみことばの進軍が皇軍である。皇軍の進むところ世界がそのままに実相楽土となって運転するのである。本来世界に『軍』は一つだけあるべきで、これが宇宙の運転を司っているのである。だから『軍』は宇宙をあらわす象形たるワ冠の中に車を書き、その『軍』の進むところ宇宙の経綸がめぐるのであるから、『軍』に『進む』という意味の辵（しんにふ）をかけて『運』と読む。『軍』の進むところ宇宙の経綸がめぐるのである。『軍』の進むところ敵があったり戦争があったりするように思うのは間違いである。『軍』の辵（すす）むところ天運が循環し、既にある内在の実相（大調和の世界）が実現するのである。されば宇宙にはすめらみことの軍が唯一つあるべきが本当である。ことばはただ一つ存在する中心に帰一し、統一せしめられながら辵軍（しんぐん）するのである。然るに今世界にはすめらみことの軍でないところの各国の国軍、又は政府軍が存在する。これは似て非なる軍であって本来は非存在なる仮存在の軍である。かくて仮存在である軍が対立し、軍が一つではないが故にすめらみことの軍の辵（すす）むとき摩擦を生じ軋轢を生ずる。軍ならざる非存在が軍なるがごとき装いをして皇軍に刃向かうが故に、軍ならざる者が非存在なる本来の姿に立帰る。これを敵軍の敗戦と云ひ、敵軍の武装解除と云ふ。

二

『軍』は天之御中主大神が伊邪那岐・伊邪那美の大神に宇宙をこれによりて創造生成せよとて言依（ことよ）さし給へるときに授け給ひし、天瓊矛（あめのぬぼこ）の表現である。天地を貫き通す一大鉾であるが故に、天瓊矛と云ふのである。矛であるから剣の鋒先をもってその象徴とするけれども、これは敵なき剣である。その矛より滴り落つるところの水火（しほ）凝（こ）りて自凝島（おのころじま）となるのである。これは国を生み出す天地創造の矛であり、剣であって敵を倒すための矛ではない。これがすめらみことの軍の本体である。然るに本来あるべからざる軍が、軍の仮面を装うて、皇軍に刃向ふ如き有様で出現するから、それが自壊するために一時戦争の姿が顕れるのである。

であるから、皇軍の進軍せるあと必ず王道楽土が出現するのである。王道楽土と暫く支那の言葉をもって表現するけれども、満州の如く、冀東の如く、皇軍が匪賊を掃蕩せるあとは、必ず日本なる中心国に帰一せるところの実相楽土が現実に出現するのである。その国の住民の生活は支那軍閥に蹂躙せられていた時代とは比べ物にならないほどに幸福である。その地には軍はただ一つすめらみことの軍即ち皇軍があるばかりである。皇軍に対立して他の似而非なる国軍や閥軍や政府軍が存在権を主張している限り、やがては光の前にニセ物が消滅するが如く、軍ならざる他の国軍が消滅するための自壊過程なる戦争が起るであらう。皇軍がそれを滅ぼすのではない。中心は一つであり、世界に於ける軍は、すめらみことの軍のみ唯一つであるべきであるから、他はおのづから自壊してしまふのである。

三

天地に満つる法（のり）の法輪を根本法輪と云ふ。根本法輪とは天地に満つるコトバの広がりが輪状をなして広がり行き、球状宇宙をなし、蓮華蔵世界の形をなすのを云ふのである。その言葉の瓊矛（ぬぼこ）を指しおろして掻き廻し宇宙が一中心に貫かれつつ回転せる 姿が『軍』の字である。世界は、『軍』によって立ち、軍によって運行する。『軍』とは法輪の転ずる姿である。

されば勅諭には『我が国の軍隊は世々天皇の統率し給う所にぞある』と仰せられてある。皇軍は政府軍でも軍閥の軍でもない。すめらみことの軍である。世界を治（しろ） しめし給うところのすめらみことの、み言（ことば）の延長が『軍』である、されば『朕は汝等軍人の大元帥なるぞ、されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎて ぞ、その親しみは特に深かるべき』と勅諭に重ねて仰せられてあるのである。皇軍は天皇の統率したまうところの股肱である。股肱は本体の延長であるから、皇軍は天皇のみことのりの御延長と観るべきである。しかして天皇は宇宙の主宰神にして同時に皇祖にましますところの天照大御神より地上統治の全権を委ねられ給いし方であらせられるから、地上における天照大御神の代表神位にましますのが、天皇であらせられる。その天皇が天照大御神の代表神位として現実世界の統治完成に是非必要なる、天瓊矛たるが皇軍であるのである。だから勅諭には『夫れ兵馬の大権は、朕が統（す）ぶる所なれば、其司司をこそ臣下には任すなれ、其大綱は朕親ら之れをとり、肯（あえ） て臣下に委ぬべきものにあらず』と仰せ給うてあるのである。

皇軍は宇宙創造生成化育完成の天瓊矛であるから天地の続く限り永遠に続くものである。宇宙の中心にあって回転している大法輪が『軍』であるから、『軍』が確立しな

ければ宇宙が完全に成り立たぬのである。『軍』は法輪の鳴り立つ姿であり、『車』のうえに宇宙が支えられて回転する姿である。他国の軍は、各国相対立するが為に、競い立ち争い立つための『軍』であるから、他国の『軍』はその軍備が拡張せられるに従って戦争の危険は増す。しかるに日本の軍はすめらみことの大法輪の発現である天瓊矛であるから、日本の軍はその軍備が完全になればなるほど、世界の国民は皇軍の前に敬礼してその行いが正しくなり、悪を行うものが一人もいなくなるのである。やがて理想世界が出現し、各国の軍備はやがて廃され、各国と各国とを境する国境はやがてなくなり、世界が一国になって国々の軍を構える時が無くなろうとも、皇軍のみはすめらみことの宇宙創造の股肱として、永遠に存在するのである。

四

　各国の軍隊は互に各国分立対立せる場合、自国を防衛するために存在するのであるから、防衛の必要がなくなれば廃止さるべきであるのは当然であるが、対立なくして自立している皇軍は永遠の存在である。皇位には皇軍を伴い、皇位のあるところ皇軍が附随する。それは股肱であり延長であるからである。だから皇位の存する所に三種の神器は必ず附随する。三種の神器中の『御剣』は『皇軍』をあらわしたものであって、皇位の存するところに必ず『御剣』があり、皇軍があるのである。皇軍は勅諭に示し給うた通り 『すめらみことの股肱』である。真理に背き神意に悖（もと）り、すめらみことの中心に帰順せざる一切の迷妄（この迷妄あればこそ世界が不幸に喘いでいるのである）を破壊するところの、迷妄破壊の神力の発動である。皇軍あるによって世界は初めて迷妄と真理とを明快に裁断し得るのである。

五

　草薙の神剣（みつるぎ）をもって象徴さるる皇軍は未だ嘗て侵略の戦争をしたことがないのである。本来、宇宙にはただ一つ皇軍のみあるべきであって、更に他の軍はないが故に、大国主命の軍、長髓彦の軍などと云ふが如き軍は仮相軍であって本来存在しない軍で あるが故に、皇軍の前には何等存在権を云すことが出来ないのである。手引岩（ちびきのいは）を手端（たなすゑ）にさげて来ると云ふほどに勇猛な建御名方神と雖も若葦を取り拉（ひし）ぐ如く投げ討つ事が出来るのが皇軍の威力である。皇軍に向うところ敵なく、若し刃向えばそれは虚妄仮相の姿であるから忽ち撃滅されるのである。
　撃滅するのも、敵国を苦しめるためではない。敵国を大平和裡に幸福に実相楽土そ

のままの世界に生活せしめんがためである。皇軍に敗れてその土地の住民が不幸になった実例は未だ嘗てないのである。台湾でも満州でも青島でも皇軍の威力の及ぶところ、其の土地の住民は安寧に幸福に生活し得るのである。若しこれ等の土地より皇軍を退去せしめたならば、現在の楽土は忽ち支那軍閥その他の迷妄仮相の徒の劫掠するところとなり、地獄が現じ、修羅場が現ずるのである。

斯くの如く、皇軍はすめらみことの股肱として中心神位の擁護のための神軍であり、天軍であり、天使であるから、未だ嘗て利己的目的に兵を動かしたことはない。今次の支那事変に於ける皇軍進撃の声明にも――――

帝国夙に東亜永遠の平和を冀念し日支両国の親善提携に力を效（いた）せること久しきに及べり、然るに南京政府は排日抗日を以て、国論昂揚と政権強化の具に供し、自国国力の過信と帝国の実力軽視の風潮と相俟ち、更に赤化勢力と苟合（こうごう）して反日侮日愈々甚だしく以て帝国に敵対せんとするの機運を醸成せり、近年幾度か惹起せる不祥事件何れもこれに因由せざるはなし、今次事変の発端も亦かくの如き気勢がその爆発点を偶々永定河畔に選びたるに過ぎず、通州における神人共に許さざる残虐事件の因由また茲に発す更に中南支においては支那側の挑戦的行動に起因し帝國臣民の生命財産既に危殆に瀕し、わが居留民は多年営々として建設せる安住の地を涙を呑んで遂に一時撤退するの已むなきに至れり、顧みれば事変発生以来屢々声明したる如く帝国は隠忍を重ね、事件の不拡大を針方とし、努めて平和的且局地的に処理せんことを企図し、平津地方に於ける支那軍屢次の挑戦及び不法行為に対してもわが支那駐屯軍は交通線の確保及びわが居留民確保のため、眞に已むを得ざる自衛行動に出でたるに過ぎず、しかも帝國政府は夙に南京政府に対して挑戦的行動の即時停止と現地解決を妨害せざるやう注意を喚起したるにも拘らず、南京政府はわが勧告を聴かざるのみならず、却って益々わが方に対し戦備を整へ、儼存の軍事協定を破りて顧みることなく、軍を北上せしめてわが支那駐屯軍を脅威し、また漢口上海その他においては兵を集めて愈々挑戦的態度を露骨にし、上海においては遂にわれに向つて放火を開き帝國軍艦に対して爆撃を加ふるに至れり、斯くの如く支那側が帝國を軽侮し不法暴虐至らざるなく、全支に亙るわが居留民の生命財産危殆に陥るに及んでは帝國としては最早隠忍その限度に達し、支那軍の暴戻を膺懲し以て南京政府の反省を促すため今や断乎たる措置をとるの已むなきに至れり、斯くの如きは東洋平和を念願し日支の共存共栄を翹望する帝國として衷心より遺憾とする所なり、然れども帝國の庶幾する所は日支の提携に在り、これがため支那における排外抗日運動を根絶し今次事変の如き不祥事発生の根因を芟除するとともに、日満支三国間の融和提携の実を挙げんとする外他意なく、固より毫末も領土的意図を有するものにあらず、また支那国民をして抗

日に踊らしめつつある南京政府および国民軍の覚醒を促さんとするも無辜の一般大衆に対しては何等敵意を有するものにあらず、且つ列国権益の尊重には最善の努力を惜しまざるべきは言を俟たざる所なり。

とある。中心神位の所在地たる日本の擁護はさることながら『日満支三国間の融和提携』による王道楽土を顕現せしめんがためであるとは、その声明の通りである。

更に遡れば、日露戦争の宣戦詔勅には

『東洋の治安を永遠に維持し、各国の権利利益を損傷せずして永く帝國の安全を将来に保障すべき事態を確立するは、朕夙に以て国交の要義となし・・・・・・』

と仰せられている。

日清戦争の宣戦の詔勅には

『更に朝鮮をして禍亂を永遠に免れ、治安を将来に保たしめ、以て東洋全局の平和を維持せんと欲し・・・・・・』

と仰せられている。

欧州大戦時独逸に対する宣戦の詔勅にも、

『其艦艇しきりに東亜の海洋に出没して帝國の通商貿易の為に威圧を受け極東の平和は危殆に瀕せり・・・・』

と仰せられている。斯くの如くすべて世界平和のために人類の幸福のためにのみ、すめらみことの軍隊は進軍するのである。然して皇軍の進軍のあるところ、必ずその後より平和は生れ、その地の住民は幸福生活を送り得るようになるのである。

六

かくの如く皇軍は天祖の宇宙創造生成化育の武器たる天瓊矛の顕現であり、創世（はじめ）にコトバありのコトバの進軍であり、宇宙根本の大法輪の顕現であり、その大法輪なるコトバは皇軍に対しては勅諭をもって示されているのである。だから、皇軍は形の上から見るならば一個々々の将士であり、それが編隊されて部隊となり総隊となり旅団となり師団となっているけれども、それは形の上のことであって、皇軍の内容は畏くもすめらみことの勅諭であるのである。勅諭にはすめらみことの大御心が充ち満ちていて、その勅諭のミコトバ、ミコトノリ、ミココロが皇軍の本質であるのである。その大御心、大御敕（おおみことのり）の表現が皇軍として表現されているのである。だから皇軍軍人は召集されて陸海兵役に服するとき勅諭を謹録せる軍隊手帳を身につけるのは、勅諭を自分の腹の中に入れることであり、外形は一個の人間であるが、内容は勅諭の心となり勅諭と一体になって生きるのである。だから陸海軍

人はすめらみことのミコトノリの延長として世界平和宇宙創造生成化育のことを言依させられし、すめらみことの股肱となり天軍となり、神軍となり、天使となり、天瓊矛として世界秩序完成のために働くのである。だから皇軍の行動は列国の賞嘆するが如く、謹厳であって、他国の軍隊に往々あるが如き掠奪を行ふなどのことは決してないのである。神定（かんさだ）の天軍としてただ世界の平和と幸福とのために奉仕するのである。

斯くの如く皇軍は、形は軍隊であり、その内容は勅諭であるが、その表示は軍旗をもって代表せられる。軍旗は、ここにすめらみことの軍隊ありの表示としてすめらみことより親授遊ばさるるのであるから、軍旗は神旗であり天皇の軍すなはち天皇の大神敕（おおみことのり）の延長として、皇軍の将士自体に対しても、また対外的にも臨むのである。だから、軍旗の進むところ、天皇の大御敕の進軍であり、大真理の進軍であり大法輪の進軍である。だから皇軍の将士は軍旗の前に肉体の生命を捨てることを鴻毛の軽きに比するのは当然である。大真理の進軍の前に仮妄の生命を捨てるのである。天皇の大神敕に融合することによって個我を没し去るのである。大法輪、大生命に召されて行くことによって個生命を没し去るのである。だから応召将士を送る時にも『万歳！』である。軍旗の前に個生命を捨てる時にも『万歳！』である。凱旋して帰来する将士を歓迎する時にも『万歳！』である。『万歳』とは『久遠の生命』と云ふことである。『久遠の生命』とは天皇の大御敕であり、大真理であり、大生命であり、大法輪である――この大なる真理と一つになっているとき、肉体は死するも生くるも共に万歳なのである。

七

皇軍の本質は宇宙創造の天瓊矛であり、その表示は軍旗を以って代表せられるが、ひとりひとりの軍人はすめらみことの股肱である。股肱であるが故に一糸紊れざるところの軍紀の下に活動するのである。軍紀は軍のノリである。何故軍にノリがあるかというと、軍はすめらみことの大法輪であり、法はそれ自体に法（のり）であるから、軍はそれ自体の中に紀（のり）を蔵するのである。皇軍の軍紀は他律的に権力者より隷属者に押し付けられたる規則ではない。他国の軍隊の軍紀は権力者が統制の便宜のために隷属者に押し付けた規則であるが皇軍の軍紀はそれとは全く異るのである。一人一人の軍人は勅諭の示し給う如く畏くもすめらみことの股肱であるが故に決して隷属者ではないのである。軍人が上官に絶対服従するのは上官に隷属するからではない。圧迫による隷属ならば必ずや反発が生ずるのであるが、軍人は上官の命令（コトバ）の中に、すめらみことのミコトバを視、みずからもすめらみことの股肱たる軍人とし

て自律的にどこまでも絶対にそれに服従せずにはいられないのである。ここに皇軍の軍紀に絶対服従が徹底的に行われ、決して何らの反動を視ず何らの反発をも見ないのである。『上官の命を承はること実は直に朕が命を承る義なりと心得よ』と勅諭に仰せ給ひしは決して規則を押し付けられる意味で仰せ給うたのではなく、皇軍の本質上、軍人はすめらみことの股肱であり、宇宙の創化の大法輪を形成するところの一つ一つの法輪であるが故に、その自然の本質として自律的にみずから進んで上官に服従することを明瞭に大神敕の上に表現し給うたのであると拝し奉るべきである。

八

　世界に軍は唯一つあるのが世界の理想形態であり、その唯一つの軍とは皇軍であり、その唯一つの軍に統一せられずして各国互に軍を擁して対抗している限り永久平和の世界は来らず、永久幸福の人類世界は来らないのは当然である。それ故に結局は現象世界が実相秩序を具現して完成の域に進むに従ひ、世界各国の国軍の数は次第に減少して唯一つの皇軍のみとなるのは当然のことである。凡そ、大は太陽系統から、小は物質分子の電子構造に至るまで、その中心は一つであることによってのみ完全に統制がとれているのである。人間にも動物にも頭首は一つであり、樹木の幹も一つである。地球上だけに頭首たるべき主権者が複数にあるのは、世界秩序がまだ本物になっていないからである。だから世界秩序は現在の状態が次第に崩壊して、世界はただ全世界一軍の理想に近付いて来るに相違ないのである。全世界一軍の理想に近付くといっても、決して外国が自発的にその軍備を撤廃して、ただ皇軍ひとつに世界の大法輪の中心統制を委すと云ふことにはまだ中々ならないであらうから、ここに皇軍の威力を示さねばならぬ時期が来るのである。皇軍は威力を示すといっても平和を楽しむその土地の住民に威嚇を与へるのではない。皇軍にまさる軍なきことを他の虚妄仮相の各国対立の軍に知らしめて、つひに軍といっては世界に『皇軍』のみあれば他に軍隊の必要なきことを知らしむるに到らしめ、延いては地球上にただ一つの頭首があるべき宇宙理想に基いて一君万民の宇宙の実相を実現せしむるに至らしめる働きが、この皇軍の使命であるのである。世界にはただ皇軍のみが真の唯一の軍であり、他の軍隊は悉く虚妄仮相の似而非なる軍なることをここに繰返して置く。

（谷口雅春「皇軍の倫理」　『谷口雅春選集』潮文閣、１９４１年、284－293 頁、一部現代仮名遣いに改めた）